

1月7日(木)放送 **「テーマ 龍馬伝特集『坂本龍馬』」****「龍馬のすべて」**

平尾 道雄／著
 高知新聞社 1995年 5月発行
 2階郷土開架図書 (請求記号 K289/カ-7)

県下では、昨年から書店の店頭に多くの龍馬関連の書籍が並び、各所で「福山龍馬」のポスターが人々の目を釘付けにしている。世はまさに空前の「龍馬ブーム」の様相である。ドラマを機会に龍馬をそして幕末維新の歴史をもっと知りたいと考える人も急増中と聞く。

わずか30年余りの人生を完全燃焼させ、維新回天の偉業の立役者となった龍馬。数多い「龍馬本」の中から、本日は平尾道雄著『龍馬のすべて』を紹介したい。本書は1966年に地元高知新聞に掲載された著作を改編し、新装版として出版されたものである。著者の故平尾氏は周知の通り、全国的にも知られた土佐史の研究者で、平易な文体でありながら緻密な視点で著された本書は、執筆後40年余りを経た今日でもなお龍馬の魅力を人々に伝え続けている。ぜひ、ドラマの放送開始に併せ読んでいただきたい1冊。

「坂本龍馬」

松浦 玲／著
 岩波新書(岩波書店) 2008年 11月発行
 2階郷土開架図書 (請求記号 K289/カ-7)

坂本龍馬が幕末の激動の中で国事に奔走したのは、28歳から33歳までのたった5年間だった。このことは、わりによく知られていることである。脱藩した文久2(1862)年から暗殺される慶応3(1867)年まで、龍馬にとって人生最後の5年間は、まさに彼の人生全てをかけた密度の濃い5年間だったといえよう。

大河ドラマでどのように描かれるのか楽しみでもあるこの5年間、龍馬はいかに行動し、何を思い考えたか。

本書は龍馬自身が残した手紙や、周囲の人々の日記や手紙、回想、また海援隊の記録などをもとに、不明な部分も残る龍馬の足跡を辿ろうとするものである。膨大な史料の中から見えてくるものは、現代に生きる我々同様に、周りの状況に流され揺れ動き、しかも理想を諦めずに時代と格闘する、いわば等身大の龍馬の姿である。

詳細な内容がコンパクトにまとめられており、手軽に読めたうえに、最新の龍馬研究の動向もわかるというお得な一冊。

「龍馬を斬る 誰が龍馬を殺したか」

黒鉄 ヒロシ／著
 小池書院 2007年 7月発行
 2階郷土開架図書 (請求記号 K726/145)

今年(2010年)は、坂本龍馬と中岡慎太郎が京都近江屋で暗殺されてから143年目にあたる。事件後143年を経てもなお、龍馬らを襲った刺客の正体(あるいは黒幕)は明らかでない。真犯人をめぐる様々な仮説が出されているが、中には素人から見ても奇説・珍説と思えるものも少なくない。

本書では、幕末史をテーマにした一連の作品でいわゆる「歴史」のスタイルを確立した黒鉄ヒロシが、それらの諸説を吟味し、坂本龍馬暗殺の真犯人を推理していく。大本命である薩摩藩説はもちろんのこと、新選組説、土佐藩説、フリーメーソン説に、中岡慎太郎説まで、様々な仮説が取り上げられ検討される。土佐藩説では、龍馬暗殺に弥太郎が深く関わっていた可能性も指摘される。

読んでいて痛感するのは、史料を読む面白さと怖さである。同一の史料、証言であっても、読み方によって如何様にも解釈が変わっていく。逆に言えば、だからこそ、これだけ多くの犯人像が生まれてくるのだとも言えようが。

扱っているテーマが血生臭いものにも関わらず、読後感がさほど暗いものにならずに済んでいるのは、なんとと言っても龍馬らの喋る「土佐弁」の御蔭であろう。黒鉄さんならではの、あけっぴろげな土佐弁のやり取りを読んでいると、「まっこと坂本のオンチャンが喋りよったにかあらん」と思えてくる。